

石田 浩著

『中国農村社会経済構造の研究』

川 井 悟

畏友石田浩氏の二冊めの著書が出版された。氏の構想する三
 作（台湾漢人村落の研究」「大陸中国農村の研究——解放前」
 「同——解放後」）の第二冊めである。氏は知りあって十二年
 になるが、この十二年間は、氏が社会主義中国への関心からその
 農村社会経済の研究を専門的に開始し、資料にもとずいて独自の
 中国農村社会像を形作らんとしてきた年月であった。その間、私
 も、氏や他の研究者の卵たちといっしょに、中国農村関係の文献
 を読みつつ、議論に熱中し、その中から私なりの中国社会像や農
 村像を作ろうとしてきた。つまり、中国農村研究については、ほ
 ぼ同じ時期に、学びあい、刺激しあい、考えを深めあう仲間だっ
 たのである。

もちろん、氏は私よりも農業や農村についてははるかに詳しい
 し、比較にならないほど勉強している。とりわけ、農学部所属と
 いう条件によって、氏をとりまく空気そのものが、日本の農業や
 農村との比較、そして農業技術や農村社会関係についての考え方を
 鍛えるうえで役立ったであろう。その点、私の方は工業もやり

経済政策にも手をつけるといった具合で、文献上で中国とつきあ
 った分量は氏とさほど差はないと思っているが、いかんせん農村
 に対する集中性がちがう。しかも氏は、大陸中国との交流が不自
 由であった時期には台湾の漢人村落を研究対象としてとりあげる
 ことよって、文献資料による限界を突破して漢人村落の実態を
 認識することに意欲を燃やし、大陸との交流が比較的可能になっ
 た近年においては何度も中国農村を訪問し参観して、身をもつて
 中国農村社会を体得することに余念がない。こうして、ほぼ同時
 期に中国農村に手をつけたにもかかわらず、認識の広さと深さに
 おいては大差がついてしまった。

認識の点で狭く浅い私が、こうして氏の労作を評するというの
 は無謀なことである。その評は的にはるか届かないかもしれない
 この点で、本稿には氏の考えについての理解が十分でなかったり
 誤解したりしている箇所が多々あるであろう。あらかじめ寛恕を
 請うておく。しかし、ひらきなおつていえば、浅いがゆえに農村
 研究の専門家が知らずに陥っている偏見を照射することができ
 かもしれない。それによって、もしもいくらかでも氏の研究への
 刺激になれば幸いである。また、同じ研究サークルの人間がなす
 書評というのは、往々にして一種の馴合に陥り、評として公正さ
 と適切さに欠ける場合がある。この点についてもひらきななおろ
 う。私は典型的な馴合の書評をするつもりではない。だが、それは、馴
 れ合つて「よくやった」と慰めあうためではない。氏ならびに私
 たちが現在達している中国農村研究の水準を確認し、将来の可能
 性を探りたいと思うからである。以下で氏の著書の概略を紹介し
 てその骨格をとりだし、問題となる二点にしばって論じよう。

まず、本書の内容を簡単に紹介しよう。章別構成は次のとおりである。

第一章 中国農村社会経済構造研究の再検討と分析視角

第二章 一九三〇年代華北棉作地帯における農民層分析——とくに冀東農村の「富農」経営の性格に関連して——

第三章 旧中国農村における市場圏と通婚圏

第四章 華北における水利共同体について——『中国農村慣行調査』第六卷・河北省邢台県等の調査を中心にして——

第五章 華北における「水利共同体」論争の一整理

第六章 解放前の華北農村の一性格——とくに村落と廟との関連において——

第七章 解放前の華中江南農村の一性格——『江蘇省農村実態調査報告書』の各事例を中心として——

第八章 解放前の華南農村の一性格

終章 中国農村社会経済構造研究の総括と展望

あとがき

序章にあたる第一章と終章を除けば、各章はそれぞれ、一つの村あるいは一つの地域の農村社会の性格あるいはその一側面を、一つまたはいくつかの主として日本人の調査にかかる資料をもとに、扱っている。章の配列の順序は、華北、華中、華南というように、天野元之助『中国農業の地域的展開』にならって、北から南へと進む。第二章から第六章までの配列が、華北地区内での北から南へという地域的配列なのか、それとも土地所有、農民層分解、農村市場、村落という第一章第三節にみられる氏の農村社会経済構造分析の論理的展開順序なのかは定かではない。また、中

国農村とはいっても、東北地方やモンゴル、黄河中上流地域、揚子江中上流地域、西南地方の農村についての考察はない。氏が対象を旧中国（解放前）にしぼったため、歴史の浅い東北地方および、歴史はあっても資料の乏しいとみえた地域は除外されたのであろう（第八章注③参照）。

各章は第一章と終章を除けば、すべて同じ叙述形式をとっている。各章の第一節「問題の所在」では、従来の研究に対する疑点と当該農村では何が主たる論点になるかが示される。第二節以下では資料の紹介や対象地域の概況説明がなされる。そして、論点についての叙述や分析がなされたあと、末尾「結語」において、従来の研究に対してその章で論証できたことが確認される。第一章「中国農村社会経済構造研究の再検討と分析視角」では、こうして第二―八章で各地域ごとに述べられた従来の研究の問題点とそれに対する氏の考え方がまとめて述べられており、終章「中国農村社会経済構造研究の総括と展望」では、各章で地域ごとに述べられた結論が再要約されている。このように氏は、問題関心や従来の研究への疑点それに分析の結論を何度もくり返し述べているのであり、氏の問題関心と分析結果たる結論を知るだけならば、第一章と終章を読めば十分である。

形式の紹介はここまでにして内容に入ろう。

第一章はすでに述べたように、氏の中国農村に対する問題関心と従来の研究に対する疑点をまとめて述べたものである。第一節では、氏の中国への関心はなによりも現代中国社会主義への関心であったことが示される。そこには、「物的生産諸力の増大と諸個人の開花が実現される」（四ページ）社会主義社会が資本主義

段階を経ずにいかに実現されるのかというマルクス主義の観点から世界史を見る場合に出てくる一つの理論的問題と、中国社会学は旧中国農村（解放および革命前の中国農村）をどのように変えてきたのかという一つの事実認識問題が結びついて存在していたのであった。すなわち氏は、従来の研究を検討したり資料にもとずいて氏自身が分析した結果、旧中国の農村は個人が析出する「市民社会」とはとうてい考えられないとする。そうすると、「市民社会」でなく、また資本主義でもない旧中国農村に対する「中国社会学」の「社会学」的変革は、「市民社会」ではない社会に対する資本主義段階を経ない社会主義社会の実現の可能性如何、というマルクス主義の一大理論問題研究の恰好の一事例となるのである。

「中国社会学」の問題は氏の第三冊めの著書において論ぜられるであろうから、ここではこれ以上触れない。とにかくこうして、本書では、解放前の中国農村社会が「市民社会」ではなく中国的「共同体」であることを論証することが課題となったのである。

つづく第二節では、日本における中国農村社会研究史が、一九二〇年代後半～一九三〇年代前半、一九三〇年代後半～敗戦、戦後と現在の三段階に分けて回顧される。それは、当初自明のごとく考えられていた「共同体」の存在が、さまざまな実態調査資料の獲得と利用によって、「共同体」あるいは農民を規制する枠組についてのイメージを変えられていく過程にはかならない。氏は研究において実態調査資料の利用を非常に重視する。したがって氏が再検討するに値するとする研究は、実態調査資料を一部分利

用しえた「平野・戒能論争」および戦後に発表された諸研究である。その中国社会学への問題関心からして旧中国農村社会をなんらかの中国的「共同体」として性格づけることを課題とする氏にとつて、とりわけ問題となるのは、「村落共同体」の存在を否定し、社会経済単位としての農民の行動への村落の規制力を否定して、むしろ農民の行動を規制する枠組を農村市場圏に求めようとする見解^③、および農業におけるブルジョア（資本家）的發展の可能性を論証し評価しようとする見解である^④。それら見解に反証することを氏は第二章以下の具体的農村分析の中で行うのであるが、第三節では「再検討」という形式で結論を先どりしている。それは本書の叙述上では四項目に分けて論じられていて、その主要論点は五点ある。

第一点は、農村に「共同体」が存在しているか、「市民社会」が成立しているか、という問題である。なるほど中国農村においては、共同体的土地所有を媒介にした共同体結合は存在せず、したがって「村落共同体」は存在しないことが確認できる。しかし、同族や同村民の土地の先買権の存在、高粱の開墾子慣行、廟地の存在などをみると、中国農村社会への市場経済原理の浸透は不十分であり、農業生産力の低位ともあいまって、前述のような人間関係や慣行は、農民の没落を防ぐという消極的な形にせよ、濃厚に機能していたのである。つまり、中国農村社会は決して自立した個人の存在する「市民社会」ではなかったのである。

第二点は、地主・小作関係の性格についてである。地主・小作関係は中国各地域ごとにさまざまな様相を表わし、地主を単純に支配階級としてとらえることはできない。第三点は、農業におけ

るブルジョアの発展の可能性についてである。氏は、経営規模間の格差は必ずしも生産力格差となって現われないため、大経営が優位であるとはいえないことを主張し、さらに農村における雇用労働の質の問題をとりあげてそれを資本主義的賃労働とする見解に疑念を表明する。農民層の分解については、むしろ、農民の総体的没落が一般的であって、それはただ村落における人的結合によつてのみ防ぎとめられているのだという。

第四点は、社会経済単位としての農村市場圏の問題である。氏は、農村社会を考察する際におけるその意義をみとめつつも、村落もまた社会的枠組として機能していたことを強調する。たとえば、村の役員による、看青、村民間の喧嘩の仲裁、村裁判、廟の運営、打更や出役の割当て、雨乞や乞食旅行の指揮、税の割当て、上意下達といった機能が村を一つの社会単位としてまとめていたことは、村が農民の社会生活における一つの枠組であった例である。また、解放後の社会主義的改造過程においても村が存続し続けたところに、村がなんらかの社会単位としての機能を果たしていたのではないかと推測させる根拠があるという。第五点は、中国の村落の性格についてである。それはたんなる雑居集合体（アパートのようなもの）ではない。村民は「同族（血縁）」と「同郷（地縁）」という二つの結合原理によつて、村落の枠内でのさまざまな人的結合による互助関係によつて農業と生活の再生産をなしているのである。

こうして再検討の結果、前述の二つの主要な見解には多くの疑点があることが示された。では、中国農村の社会経済構造はどのように考えられるべきか。すでに再検討時に結論の輪郭は暗示さ

れているのであるが、それは、個別的地域における主要論点についての検討を実証的に行なう第二章以下の各章の内容をみてのちに、まとめて述べることにしよう。

第二章が対象とする農村は河北省豊潤県米廠村である。資料は、一九三七年から一九三九年にかけて満鉄が行なった冀東地区農村調査をまとめた『第二次冀東農村実態調査報告書・統計篇』豊潤県と、昭和一二年度、昭和一四年度の『農家経済調査報告』。反証対象は吉田法一氏の見解である。石田氏によれば、吉田氏は、米廠村における綿作が富農経営型綿作であるとし、上層農における農業生産力が下層農のそれよりも大きいゆえに農民層の両極分解が起こり、雇用労働力を使うブルジョアの富農が析出されたと主張しているとされる。この吉田見解に対し、石田氏は、吉田氏とはほ同じように農家を上・中・下の三層に分けて、それぞれの綿花作の特徴を検討する。

まず、上層農は土地、役畜、農具等の所有において他層よりも優位にあるが、土地生産性や労働生産性の面では他層と大差ない。また上層農といえども年度ごとに収益の変動が激しく経営は安定していない。他層に比べて大幅に多い収益をあげた一九三九年度も単位面積あたりの綿花生産量では差はなく、その利益は綿花の販売操作によるものとされる。こうして、上層農が他層に比べて生産力的に優位にあるとはいえないことが示された。次に農民層の分解についてであるが、氏は、昭和一二年度～一四年度の三年間の『農家経済調査報告』の比較利用によつて、この三年間の規模別農家所有・経営戸数の変化を調べ、一一～一〇〇畝所有層の増加、三一～一〇〇畝経営層の増加、および所有面積の分布に比べて経

管面積の分布が上方に偏倚しているゆえに小作という形で無所有戸や下層農の経営規模拡大欲求の強いことを主張する。こうして「大経営の前進、中層の没落」という見解は否定された。このほかに、氏は三年間の選択農家の作目別作付比率の変化から上層農の綿花単一経営化傾向を否定し、零細農民が雇用労働者になるか小作人になるかは等しい可能性をもつゆえにそれらは同性質のものであると主張している。以上の結果、「上層農のブルジョアの発展は不可能だ」というのが氏の結論である。

本章は吉田説を単純な両極分解からブルジョアの発展の可能性を主張しているものととらえ、それを事実資料によって反証することを目的としている。一九三〇年代の中国における農民層分解の諸類型の全体的理解をめざし、米廠村の綿作に富農型綿作経営の存在およびその特徴を見出さんとした吉田氏にすれば、この批判ははずれであろう。農民層分解のあり方について議論することは石田氏の目的ではない。氏にとっては、商品経済は自然災害と同様、農民にとって外的条件なのである。そして生産力低位というもう一つの制約条件によって、農民は全体的に没落するしかない。このドグマをさらに、没落を免れ生活を維持するためにはなんらかの人的結合が不可欠である、と展開するためには全体的な没落という傾向以外のあらゆる可能性を否定することが必要であった。石田氏の論理の展開にとっての本章の意義はここにあり。

第三章は、河北省樂城県寺北柴村の通婚圏を調査した『中国農村慣行調査』第三巻を資料に、樂城県の各市集の様子や市集圏の構造、河北・山東両省農村の婚姻慣習（媒人の性格をも含めて）、寺北柴村の一八六人の妻の出身村の地理的分布（通婚圏）を調べ

たものである。この結果、通婚圏は、県域に近接している寺北柴村の場合、ほぼ県域を中心とする市集圏に重なっており、その理由は、婚姻において媒人の果たす大きな役割と媒人の社会交通領域を舞台にしていること、よることが示された。そして、この媒人をめぐる婚姻慣習は、親戚や友人といった村落・同族的要因にもとづく人間関係を基礎にしており、婚姻における村民の行動は決して市場圏内で自由になされるのではなく、村落と同族という人的結合が介在していたことが示されたのである。

第四章と第五章は、同じく『中国農村慣行調査』第六巻を資料として、河北省邢台県七里河下流の水利組織を分析したものである。そして、「鎌」という水利権が土地と結びついていること、水利組織の役員は村あるいは同族を基礎として選挙されていること、水利組織の役員は村を媒介にして組織に参加していること、水争いは水利組織内部で解決されていること、の四点から、水利組織はゲゼルシャフトではなく、「共同体」、それも村落に対する「二次的共同体」であると結論される。

第六章も『中国農村慣行調査』第一～五巻を利用する。対象は、河北省順義県沙井村、同省樂城県寺北柴村、山東省歴城県冷水溝荘、同省恩県後夏寨、河北省昌黎県侯家宮、同省良郷県呉店村である。資料から、村落の形成史（移住史）、雑姓村であること、村廟とその意義、廟運営（祭祀、会計、役員）のしかた、廟役員と村役員の一致性、廟財産は村財産であること、村の事業としての雨乞いと廟の修繕そして学校運営、が農民との質疑応答を引用して説明・例証される。その結果、これらの村落は明初以降の移住により形成されたこと、形成初期の不安を鎮める拠りどころと

して雑姓村では村廟が建立されたこと、廟は村全体で運営されてきたし、村の財産とは廟の財産のことであり、廟の事業は村の事業であったこと、この状態のもとでは村事といえば廟に関するだけで村役員というのは廟役員であったこと、ところが清末以降村事の増大とともに村役員と廟役員とが機能分化してきたこと等が示された。廟は村落民の心の拠りどころであるとともに、廟祭は村民の団結をはかるものであり、廟財産は村内貧困者の生活を保障するうえで役立った。中国の村落は、「村落共同体」ではないが、さまざまな人的結合が廟を中心として営まれる舞台なのである。

本章は華北農村の社会構造についてのまとめとなっている。たしかに、農民にとって、経済社会活動の領域として市場圏は大きな意義をもっているが、その生活と生産を安定させるうえで重要なのは血縁と地縁にもとづく人間関係であり、それらは村落を一つの枠組として存在しているということである。したがって、市場圏と重なる通婚圏も、また一見するとゲゼルシャフトとみえる水利組織も血縁と地縁をその結合原理とする村落なしでは十分理解できないのである。

第七章は華中江南農村を対象とする。資料と調査年次、調査農村名は次のとおりである。満鉄上海事務所調査室編『上海特別市嘉定区農村実態調査報告書』（一九三九年 石崗門郷澄塘橋、丁家村）、同『江蘇省太倉県農村実態調査報告書』（一九三九年 利泰郷遙溼部落）、同『江蘇省常熟県農村実態調査報告書』（一九三九年 敵家上）、同『江蘇省松江県農村実態調査報告書』（一九四〇年 華陽鎮西裡行浜、許歩山橋、薛家埭、何家埭）、同『江蘇

省無錫県農村実態調査報告書』（一九四〇年 栄巷鎮小丁巷、鄭巷、楊木橋）、同『江蘇省南通県農村実態調査報告書』（一九四〇年 金沙鎮頭総廟）、『Fei-Hsiao-Tung (馮暉通) "Peasant Life in China" (1936年 百縣吟頌江蘇縣誌)』、林惠海『支江蘇省吳興橋橋鎮社会制度研究』上巻（一九三九～一九四三年 江蘇省吳興橋橋鎮）。本章は、これらの、大都市上海を間近に控え、県域から比較的近いゆえに、商品貨幣経済の発達した農村について、農民の社会交通領域は福武直氏のいう「町村共同体」にまでストレートに拡がらず、さまざまな血縁・地縁により生じる社会関係が存在したことを実証する。それは農耕上では、(1) 換工の普及と雇傭関係にも血縁・地縁による結びつきが見られること、(2) 農具や家畜の無償貸借・共同所有・共同利用、(3) 水利灌溉労働の地縁的集団性、に表われる。また土地売買上では、「田儘田隣」といった土地所有権の移動に際しての村の閉鎖性を示す慣行が見られる。金融上では、農民間の相互扶助的金融たる銭会が存在や同族・友人による無担保金融の慣行が示され、さらにクリーク利用における村の排他性、看青慣行と盗人の罰金の廟祭費用充当慣行が示される。これら慣行の存在は、商品貨幣経済の浸透のもとで没落の危機にさらされた個別農民が、血縁・地縁を通じて、かえって相互扶助的な「生活共同体」の再生産を強めていることを示している。

第八章は華南農村を対象とする。本章では前章までと違って、主として依拠されている村落調査資料はない。叙述は、華北・華中と比較した華南農業の特徴、土地所有面積と経営面積の特徴、自小作別農家割合の特徴、といった概況を説明したあと、もっぱら同族結合に関する文献を利用して、その結合の特徴を、(1) 族

田の割合とその形成史、(2) 族田の小作制度、(3) 同族の祭祀、(4) 族間の械闘、(5) 族内裁判、にまとめ説明することに費される。ここでは、華南農村において、土地所有・経営面積の零細な農家が多いこと、零細な農民は同族田に依拠して生活していること、族田は地域差はあるものの広東省では重要な割合を占めること、同族結合は族田の存在、族の祭祀、械闘、族内裁判に典型的にみられるようにきわめて強固なものであること、が示された。

以上の論証によって、中国農村の社会経済構造はどのように把握されるのだろうか。地域によって、農法、農業生産力、商品経済の浸透、村落形成史などに差はあるものの、一般に中国農村では、個々の農民あるいは農家は、たんに個別的に市場を通じて結びつくだけでなく、それ以外にもさまざまな人間関係あるいは人的結合を形成している。それらの人的結合は血縁・地縁という主として二つの結合原理によってもたらされ、村落はそれら人的結合の一つの完結した枠をなす。注意しなければならないことは、地域および村によって、血縁・地縁のいずれがどのように結合のモメントをなすかにはちがいがいるということである。石田氏は、このような人的結合を含む枠組としての村落を「生活共同体」と呼ぶ。生産力の低位に制約され、自然や政権といった外圧から自らの生活と生産を守るため、農民はこうした「共同体」に依拠して生活し生産を行ってきたのであった。そしてこのような「生活共同体」は、生産力の低位と外的条件による不安が続く解放後においても一貫して存在していると考えられる、というのが氏の主張である。

本書は、戦前から戦後にかけて日本で論じられた中国農村社会の構造、とりわけ村落共同体に関する議論に真正面からとりくんでいる。そしてその議論の過程の中で得られた研究成果を自己の中国農村社会経済構造理解の中に生かそうと努めている。近年、市場・商品経済関係から中国社会経済を分析し、一九四九年以前は半封建半植民地社会経済、一九四九年以後は「社会主義」あるいはその過渡期であると考えられる見解が数多くの成果を生み出してきた。本書は、それら分析から脱落している農民の協同関係を社会経済分析の中心にすえることによって、一九四九年以後の「中国社会主義」を一九四九年以前との連続性において理解し、そしてそれゆえに、「中国社会主義」の独自性をも際立たせうる視角を提示している。後進国「社会主義」分析における「共同体論的視角」とでもいえようか。こうした視角から、農民の協同関係が社会主義的変革以前にどのように存在していたのかを追求したのが本書の分析であった。この視角の自覚的提示と、解放前におけるその一定程度の有効性を実態調査資料からたんねんに例証しえたことが、本書の成果である。

与えられた紙幅はあとわずかゆえ、本書のはらむ問題点について、簡略に私の意見を述べよう。まず第一に資料の使い方の問題。氏は「実態調査資料」に依存しすぎている。事実にもとづかない空論はもちろん問題外であるが、「実態」を調査した資料の文面に素直なことがその分析を意義あらしめるわけではない。調査がどのような点になされたのか、一つひとつの情報は何を示し何を示していないか。この点についての分析がもの足りない。二つだけ例を出す。冀東農村の調査数字はあまりに数字として詳しすぎる。

それゆえ、わずかな数字の差に大きな意味を認め、そこから変化傾向を一般化するのには無理がある。たった三年間の期間に数字の増減があることから分解傾向をいうには数字の背後の意味を問うべきだ。また、協同慣行の存在は、文面に表われない多数の非協同慣行と補完しあっている。「共同体論的視角」にもとづいて、わずかな協同慣行の存在からその全面的存在を主張するのは正しくない。資料の性質の分析によりたとえ「共同体論的視角」にもとづいているとしても、とりあげられている協同慣行にはその実態にふさわしい意義づけがなされるべきであろう。いくつかの相互扶助関係を「生活共同体」に結びつけるのは明らかに無理があり、「共同体」概念そのものを浅薄にする。次に述べるように、氏が「共同体」という用語にこだわるのも、「共同体」探求という問題意識をもって実態調査した人々の作った資料を、あまりに素直に利用したためかもしれない。

第二、共同体をめぐっては、すでに氏と数えきれないほど議論をしてきた。その中の論点の一つは「生活共同体」概念についてであった。この概念が本来の「共同体」概念ではなく、「市民社会」か「共同体」という二者択一的発想から中国農村社会を規定した結果出てきたものであること、それゆえにその意味はなんらかの人間関係、あるいはせいぜい相互扶助関係にすぎない場合もあること、は明らかである。氏にとっては、「共同体論的視角」の表明が必要だったのであり、解放前の村落や人間関係の分析も中国農村社会にいかなる「共同体」が存在しているかという歴史的研究ではなく、たんに「共同体論的視角」で中国農村社会を見れば、それがどう見えるかという「一性格」表示でしかないの

である。この結果、氏の「生活共同体」の「共同体」性はきわめてあいまいなものになっている。第一に、氏は「共同体」という用語に執着するが、それはなぜ「社会関係」や「集団」ではないのか。あえて「共同体」と名づけるべき根拠はあるのか。第二に、商品交換関係は他の社会関係と排他的な性質をもつとは限らず、それはそれをなりたせ補完する人間関係を必然的に伴っている。氏の「共同体論的視角」からは、商品交換関係は「市民社会」的なものとして農民と農家にとつての外的条件とされてしまふ。商品経済関係とそれをなりたせ補完する人間関係の総体をとらえる社会論はないものか。第三に、商品経済発展の歴史的發展段階を考慮に入れ、たんなる「社会集団」ではない歴史的存在としての「共同体」論を展開するには、氏の「生活共同体」では、そもそも歴史的研究に必要な生成史的理解を欠いている。第六章の移住史や村廟建設史は「生活共同体」概念の生成史的理解にまで高められていない。一九三〇〜四〇年代の調査資料からうかがわれるような性格の村落はいったいいつ出現したのか。それは、台湾漢人村落形成史から示唆されるように、移住と村の形成以来同じ性格を示してきたのだろうか。氏の共同体論はこうした歴史的变化の研究に補われてこそ、たんなる「視角」の主張以上の意義を有するであろう。

① 三部作とは、『台湾漢人村落の社会経済構造』一九八五年 関西大学出版部、本書、それに氏が現在次々と発表しつづける一連の論稿を集成したあかつきに上梓されるであろう『中国農村社会経済構造の変容分析』の三冊である。なお、『台湾漢人村落の社会経済構造』については、すでに松田吉郎氏に詳細な書評がある。(関西大学『経済論

集』第三六卷第一号 一九八六年五月)

- ② この共同学習の思い出については、前述の『台湾漢人村落の社会経済構造』の「あとがき」や本書の「あとがき」に詳しい。また、私たちの研究会活動については、京都大学中国经济研究会『会報』第一号～第四号、臨時号(一九七六年十月～一九七九年九月)および『活動状況表』(一九八一年三月)、野沢豊『近きに在りて』第二号(一九八二年九月)、「研究会めぐり京都大学中国经济研究会(京都)」、同号内山雅生『中国農村慣行調査』と華北農村社会の実態把握」、同第九号(一九八六年五月)、「第四回『中国農村慣行調査』合同研究会の記録」、石田浩『中国農村慣行調査』研究と樂城県寺北柴生産大隊の訪問」、『東方』三六号 一九八四年三月、等にその一端が紹介されている。
- ③ この見解の代表者として氏は次のような人々を第三章でとりあげ、

検討している。福武直『中国農村社会の構造』(『福武直著作集』第九卷 東京大学出版会 一九七六年)、古島和雄「旧中国における土地所有とその性格」(山本秀夫・野間清編『中国農村革命の展開』アジア経済研究所 一九七二年)、河地重蔵『毛沢東と現代中国』(ミネルヴァ書房 一九七二年)。

④ この見解を代表するものとして第二章でとりあげられたのは、吉田滋「二〇世紀中国の一棉作農村における農民展分解について」(『東洋史研究』第三四卷第三号 一九七五年一月)である。なお、同氏には「半植民地中国における農民展分解についての覚書」(『新しい歴史学のために』一四二号 一九七六年五月)がある。

(A5版 M十三〇頁 一九八六年五月 見洋書房)

(福山大学経済学部講師